【ポスター発表】

社会的ケア関連QOLの介護サービスの質評価への適用可能性の検討

－１法人でのASCOT日本語版を用いた調査データをもとに－

○　国立保健医療科学院 大夛賀政昭（6668）

柿沼倫弘（国立保健医療科学院・7882）、森川美絵（津田塾大学・3249）、

森山葉子（国立保健医療科学院・8635）、重田史絵（立教大学・7279）

キーワード：社会的ケア関連QOL、ASCOT日本語版、サービスの質評価

１．研 究 目 的

介護サービスの質の評価については、これまで多く国内外で調査研究が実施されてきている。国内の状況に目を向けると、学術的な調査研究に加え、近年は政策上においても介護報酬上のインセンティブとしてアウトカム評価による加算の導入や科学的介護情報システム（LIFE）によるデータ収集および活用も推進されている。しかし、これらの内容は、身体機能・日常生活動作が中心となっている状況にある。

一方、QOL は、社会関係の調整などの福祉的対応を含めた「社会的なケア・支援」に関わるQOLの尺度や測定項目の開発は､国内外ともに十分ではないと報告されてきている(長澤2012、筒井2016）が、社会的ケア関連QOLを把握できるツールとして英国で開発され、日本語版が開発されているASCOT(the Adult Social Care Outcomes Toolkit)がある(森川ら2018)。

本研究では、複数介護サービスの事業所を運営する法人が利用者に対し、ASCOT日本語版（利用者向け）を調査したデータ提供を受け、分析を実施し、社会的ケア関連QOLを介護サービスの質評価に適用を検討するための基礎資料を得ることを目的とする。

２．研究の視点および方法

研究の視点：本研究では、介護サービス利用者の社会的ケア関連QOLの特徴と利用者の属性やサービス種別による差異を分析し、サービスの質評価への適用可能性を検討した。

方法：複数事業所を運営する1法人の事業所において、介護サービスを利用する者を対象として、ASCOTを含む調査が2021年8月から11月にかけて実施されたデータの提供を受けた。調査参加事業所（括弧内は、回答利用者数）は、地域包括支援センター4箇所(61名)、居宅介護支援事業所12箇所(134名)、訪問介護サービス事業所9か所(63名)、定期巡回・随時対応型サービス事業所4箇所(20名)、短期入所事業所2箇所(32名)、居住系サービス事業所6箇所(85名)､小規模多機能型居宅介護事業所2箇所(3名)となっている。

分析は、性別、年齢、要介護度、認知症高齢者の日常生活自立度（以下、認知症度)、障害高齢者の日常生活自立度(以下､寝たきり度)といった対象者の基本属性に加え､ASCOTの9つの設問別（領域は8つ）ニーズ有無（4段階：Ideal state, No needs, Some needs, High-level needsのうち下位2つが選択された場合にニーズありと定義）とASCOTの回答から算出されるSCR-QOL得点（範囲－0.38～1）を集計した（Shiroiwa et al 2020)。また、

一元配置分散分析および T 検定を実施し、利用者の属性やサービス種別による得点の差異を検討した。これらの分析にあたっての有意水準は、5%未満とした。

３．倫理的配慮

本研究は日本社会福祉学会研究倫理規程を遵守して行われ、国立保健医療科学院の研究倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号：NIPH-IBRA#12371)。

４．研 究 結 果

本研究では、利用者が ASCOT 調査に回答した 398 名のデータを分析対象とした。ASCOT 項目ごとの「ニーズあり」の割合は、「社会参加と関与」が 31.2%と最も高く、次いで「有意義な活動」25.6%であった。SCR-QOL 得点の平均値は 0.69（標準偏差±0.26）で、利用者の属性間の差を分析した結果、要介護度の軽度者群（要支援～要介護１）と中度者群（要介護 2、3)・重度者群（要介護 4、5）の間、認知症度のⅢ以上群とⅢ未満群および寝たきり度の B 以上群と B 未満群の間での有意な差がみられた一方で、同じ状態像（要介護度や認知症度等）であっても得点は広く分布していた。サービスの種別ごとの得点をみると、地域包括支援センター利用者はその他のサービス利用者と比較し高く、短期入所生活介護・小規模多機能型居宅介護利用者は、その他のサービス利用者と比較し低かった。

５．考 察

ASCOT を用いた先行研究(森山ら 2020)と同様 SCR-QOL 得点は、要介護度（要介護 2 かどうか）による差異がみられ、同一事業所や同一サービスの利用者でも属性を踏まえ、得点をみる必要性が示唆された。一方で、同じ要介護度であっても SCR-QOL 得点は広く分布していることから、心身状態とは異なる次元についても評価していると考えられた。事業所別や事業類型別に利用者の状態像に留意した上で、SCR-QOL 得点や ASCOT を構成する項目ごとのニーズ割合をモニタリングする等の方法によって、法人レベルでの社会的ケア関連 QOL をサービス評価に活用できる可能性が示された。ただし本研究は、横断データを基に検討したに過ぎず、今後は縦断データによる分析に基づく方法論の検証が求められる。

文 献

長澤紀美子. (2012). ケアの質の評価指標の開発と課題. 季刊社会保障研究, 48(2), 133-151.

筒井孝子. (2016). ケアの質評価: 国際的な到達点と日本の今後. 社会保障研究, 1(1), 129-147.

森川美絵, et al. (2018). 社会的ケア関連 QOL 尺度 the Adult Social Care Outcomes Toolkit (ASCOT) の日本語翻訳 言語的妥当性の検討. 保健医療科学, 67(3), 313-321.

SHIROIWA, Takeru, et al.(2020). Development of Japanese utility weights for the Adult Social Care Outcomes Toolkit (ASCOT) SCT4. Quality of Life Research, 29(1), 253-263.